初年次教育における
人間関係構築の場づくりに関する事例研究
――大阪経済大学人間科学部「人間関係の理論と実践」を対象として――

九　鬼　靖　太

要旨：
本研究は，大阪経済大学人間科学部の初年次教育科目「人間関係の理論と実践」を事例として，当該授業の効果と課題を検討することを目的とした。資料としてシラバスおよび学生アンケートを収集するとともに，担当教員2名を対象に半構造化インタビューを実施し，質的に分析した。その結果，本授業は，大学入学直後の学生に対して，人間関係構築の契機を提供する「場」として機能しており，学生同士の交流や協働を促進していたことが示された。また，臨床心理学，スポーツ科学，社会ライフデザインの3コースの特徴に触れる入口としても一定の役割を果たしていた。一方で，専門性理解の深化には限界があり，学生集団の実態に応じたプログラム調整や，外部講師による実践を各コースの教育目的と結びつけるための教員の関与強化が課題として示された。以上より，初年次教育においては，人間関係構築を促す場づくりと専門導入の意味づけを両立させる授業設計が重要であることが示唆された。

キーワード：コミュニケーション，協働，専門性理解，授業改善

1. 緒言

高校から大学への円滑な移行を支援するために，多くの大学では初年次教育が実施されている。初年次教育とは，高校から大学への円滑な移行を図るために，大学新入生を対象として実施される総合的な教育プログラムであり，補習教育とは異なる位置づけをもつものである。その内容としては，文章作成，プレゼンテーションやディスカッションの技法，学習への動機づけ，論理的思考力や問題解決能力の育成などが重視されている。文部科学省（2008）は，こうした初年次教育を，新入生に対して大学教育の最初に提供される基礎的教育機会として整理しており，我が国においてもその実施は広く普及している。また，初年次教育は，1970年代後半のアメリカにおいて導入され始め，国際的にはFirst Year Experience（FYE）として展開してきた経緯を有する（文部科学省，2008）。このように，初年次教育は，大学で学ぶ専門的内容を直接的に教授することに主眼があるというよりも，大学生としての基礎を固め，学習習慣やスキルを形成し，大学生活に適応するための人間関係の構築や学習環境の整備を支援する教育として位置づけられる。

1-1. 初年次教育研究の動向と課題

このように，大学教育において基礎的な役割を担う初年次教育に関して，これまで多くの先行研究が行われてきた。たとえば，林ら（2018）は大学新入生を対象に，入学直後の４日間のフレッシュマン・キャンプを初年次教育として実施し，その結果，学生の社会的つながりの認識（Social Provision）が高まり，大学適応を促進する可能性を示した。白井ら（2019）は生活デザイン学科の１年生を対象に，「生活デザイン演習A」という初年次教育を実施し，その結果，大学という場の理解，人間関係の構築，コミュニケーション力の向上，ならびに能動的・自律的な学習態度への転換がみられたことを報告した。椿本（2021）は東京大学の初年次ゼミナールを対象に，オンライン授業と対面授業の比較を行い，授業開始前の学生の期待や学修成果の予測には顕著な差がみられず，オンライン授業も対面授業と同程度に学生の期待に応えうることを示した。澤田（2023）はA大学B学部の2020年度および2021年度入学生を対象に，学習動機や協同作業に対する意識と大学適応感やGPAとの関連を検討し，入学後の適応感が学業成績などと関連すること，さらに協同作業に対する肯定的認識が適応感と結びつくことを明らかにした。また，松田（2024）は宇都宮共和大学の新入生を対象に「基礎ゼミ」の授業報告と意識調査を行い，初年次教育が大学生活の理解や学習の基礎形成に寄与する一方で，継続的な授業改善の必要性を示している。このように，初年次教育の効果や期待される役割は多様であるが，共通している点は，学生同士の人間関係の構築を促し，大学内での心理的安定性を高め，大学生活を営むための社会的基盤を形成することにあるといえる。他方で，その効果は一様ではなく，制度レベルで見た場合には，初年次教育の導入が学生の学習意識・行動に明確な影響を与えなかったとする報告もみられる（鎌田，2024）。さらに，実際の運用においては，授業内容の標準化，複数担当者間での共通理解の形成，クラス規模，評価方法，他科目との接続，学生の多様性への対応などが課題として挙げられている（日下，2024）。

1-2. 大阪経済大学人間科学部における初年次教育

本段落では，大阪経済大学人間科学部における初年次教育の文脈を示す。同学部では，初年次教育に関わる基礎科目として，「人間関係の理論と実践」に加えて，「基礎演習Ⅰ」および「基礎演習Ⅱ」が配置されている。これらの科目は，いずれも１年次に履修する基礎科目として位置づけられており，人間科学部における学びの導入を担うとともに，学生が大学での学修に適応し，今後の専門的学びへ接続していくための基盤として設計されている。実際に，人間科学部の専攻科目一覧では，「人間関係の理論と実践」「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」が基礎科目として示されており，このうち基礎演習Ⅰ・Ⅱは必修，「人間関係の理論と実践」は必履修科目として位置づけられている。また，カリキュラムマップにおいても，これらの科目は，学修の基本的なリテラシーに加えて，主体性や協調性，さらには「つながる力」を育成する基盤的科目として整理されている。その中でも，「人間関係の理論と実践」は，１年次の学生全員が受講する科目であり，人間科学部の初年次教育の中核をなす授業の一つである。同学部は，臨床心理学，スポーツ科学，社会ライフデザインという

３つの専門領域を柱として教育課程を編成しており，各コースにおいて独自の実習や専門科目が展開されている。そのため，本授業は，新入生同士の人間関係の構築を支援するだけでなく，３つの専門領域に触れながら，自らの学びの方向性を見通す契機としても重要な意義を有すると考えられる。なお，筆者は2025年度に当該科目の全体責任を担い，授業運営の企画および実施に携わった。

1-3. 本研究の目的と意義

以上のように，初年次教育に関しては，人間関係の構築や学習意欲，協働的学習などに着目した研究が蓄積されてきた。しかしながら，個別学部の教育課程の文脈に即して，授業の設計意図，実際の運営上の効果と課題，さらに学生アンケートに対する教員の解釈を総合的に検討した事例研究は，いまだ十分に蓄積されているとは言い難い。上述の通り，初年次教育の具体的実践を事例として検討することには，新たな知見を提供する意義がある。そこで本研究では，大阪経済大学人間科学部における初年次教育科目「人間関係の理論と実践」を対象として，当該授業の効果と課題について検討することを目的とする。特に，本授業が，学生同士の人間関係の構築と，学部内の３コースの専門性への導入という二つの機能を，いかに果たしているのかを検討する。本研究で得られる知見は，当該学部における授業改善に資するのみならず，初年次教育を通して大学適応と専門導入を接続しようとする他大学・他学部の教育実践に対しても，一定の示唆を与えうる。

2. 方法

2-1. 研究手順

本研究では，大阪経済大学人間科学部の初年次教育科目「人間関係の理論と実践」を事例として取り上げ，当該科目を担当した教員２名を対象とした。まず，授業の設計意図や実施内容を把握するために，シラバスおよび学生アンケートを資料として収集した。次に，担当教員に対して半構造化インタビューを実施し，授業の意義，設計意図，運営上の効果と課題に関する質的データを収集した。最後に，インタビューデータと各種資料を照合しながら分析を行い，当該授業の効果と課題を検討した。

2-2. 対象者

本研究の対象者は，大阪経済大学人間科学部において2025年度に開講された「人間関係の理論と実践」を担当した教員２名であった。１名は大学専任教員として７年の教育経験を有しており，もう１名は2025年度着任の１年目教員であった。また，両名はそれぞれ臨床心理学コースおよび社会ライフデザインコースに所属し，各専門領域の視点を踏まえて授業運営に携わっていた。なお，後述するように，筆者はスポーツコースの代表として当該科目の責任者を務めていたため，本研究のインタビュー対象からは除外した。

2-3. 研究者の立場

本研究では，筆者は構成主義的立場に基づいてデータの解釈および分析を行った。構成主義とは，知識を対象者の語りと研究者の解釈との相互作用の中で構築されるものとして捉える立場である。本研究において筆者は，実際に当該授業を担当してきた経験を踏まえつつ，対象者の語りに即してその意味を解釈した。すなわち，対象者の語りを客観的事実として一方向的に把握するのではなく，研究者自身の実践経験を背景にしながら，語りとの往還の中で理解を深めていく姿勢をとった。なお，筆者は当該科目を2021年度から担当者の一人として携わり，2022年度，2023年度，2025年度には授業責任者を務めた。

2-4. 事例とする授業科目

本研究では，大阪経済大学人間科学部の初年次教育科目「人間関係の理論と実践」を事例対象とした（大阪経済大学授業シラバス，2025）。当該授業は，木曜日６限（18：10〜19：40）に開講される必履修科目であり，人間科学部設立当初から配置されている。当初はキャンプ実習を中心とした体験型授業として実施されていたが，その後，学部内の３コースの専門性をより反映する形へと再編され，現在の授業形態に至っている。2025年度の受講者数は220名であった。授業は全15回で構成されており，初回に全体オリエンテーションを実施した後，学生は３つのクラスにランダムに振り分けられ，各コースに対応した授業を受講した（表１）。各クラスの人数は，74名，73名，73名であり，おおむね均等になるように配分した。また，第14回には，外部講師を招聘し，人間関係の構築スキルおよびキャリア教育に関する全体講義を実施した。各コースの授業は４回ずつ行われ，担当教員と外部委託先が連携し，コースの専門性への理解を促すとともに，学生同士の人間関係構築を支援することを意図して設計された。なお，各コースの授業テーマの概要は表２に示した。授業は講義形式のみにとどまらず，グループワークやアクティビティを取り入れる形で構成された。

表１．人間関係の理論と実践における授業計画（15回分）

時間	クラスA（74名）	クラスB（73名）	クラスC（73名）
1	主題：全体オリエンテーション （授業の説明，アイスブレイク，評価方法の説明など）		
2	スポーツ科学コース①	臨床心理コース①	社会ライフデザインコース①
3	スポーツ科学コース①	臨床心理コース①	社会ライフデザインコース①
4	スポーツ科学コース①	臨床心理コース①	社会ライフデザインコース①
5	スポーツ科学コース①	臨床心理コース①	社会ライフデザインコース①
6〜9	社会ライフデザインコース ①〜④	スポーツ科学コース ①〜④	臨床心理学コース ①〜④
10〜13	臨床心理学コース ①〜④	社会ライフデザインコース ①〜④	スポーツ科学コース ①〜④
14	主題：人間関係の構築スキルとキャリアデザインについて（外部招聘講師）		
15	主題：授業の振り返りと課題レポート		

2-5. データ収集

データ収集には，半構造化インタビューを用いた。インタビューは対象者2名に対してそれぞれ45分程度実施した。インタビューの実施に先立ち，授業アンケートの結果を整理するとともに，シラバスの内容を確認し，これらを参照資料として準備した。その上で，当該科目の効果と課題に関して，主として以下の点について質問を行った（① 当該授業の良さや意義，② 授業内容や構成の設計，③ 実際の授業運営でうまくいっている点と課題を感じる点，④ 学生アンケートの結果の受け止め，⑤ この授業を良くするための改善）。また，インタビューでは，対象者の回答内容に応じて，その意味をより深く理解するために追加質問を行った。インタビュー内容はすべて録音し，逐語録を作成した上で，研究目的に照らして関連する発言部分を抽出した。

表2．各コースにおける4回の授業内容

時間	スポーツ科学コース
1	・講義 「アスリートとスポーツマンシップ」
2	・アクテビティ（ライフキネティック運動） 「グループワークと運動」
3	・アクテビティ（ライフキネティック運動） 「身体操作と運動感覚の開発」
4	・アクテビティ（ライフキネティック運動） 「遊びでのリズム運動とパフォーマンス」
	臨床心理学コース
1	・「出会う」をキーワードにアイスブレイク ・体験からの学に関する講義
2	・「協働」をキーワードに協働するワーク ・ワーク後にグループディスカション
3	・「協働」をキーワードに協働するワーク ・ワーク後にグループディスカション
4	・1〜3回目のまとめと発表
	社会ライフデザインコース
1	・グループディスカション 「無人島に行った時に何を持って行くか？」
2	・グループディスカション 「防災基礎知識とデマが起きるしくみ－災害時に正しく情報をつたえるには？」
3	・グループワーク 「防災シミュレーションゲーム　ダイレクトロード」
4	・大学にいる時に災害が発生したら－自分ごととして災害時にどう動けるか？災害時においてより正しく情報を伝えるには？」

2-6. データ分析

本研究では，半構造化インタビューによって得られた逐語録を精読し，研究目的に関連する発言を抽出した。その上で，「授業の意義」「授業設計の意図」「授業運営における効果」「授業運営上の課題」「今後の改善点」という観点から発言内容を整理した。さらに，それらの内容をシラバスおよび学生アンケートの記述と照合しながら，当該授業における効果と課題という二つの側面から解釈した。本研究は事例研究であることから，結果の一般化を目的とするのではなく，当該科目の実践的文脈に即したリアリティの高い理解を得ることに主眼を置いて分析を行った。

3. 結果と考察

本研究は，大阪経済大学人間科学部の初年次教育科目「人間関係の理論と実践」を対象に，当該授業の効果と課題を検討した。シラバスと学生アンケートを参照しつつ，担当教員への半構造化インタビューを実施した結果，本授業は，学生同士の人間関係構築を促す場として機能するとともに，3コースの特徴に触れる機会として一定の役割を果たしてい

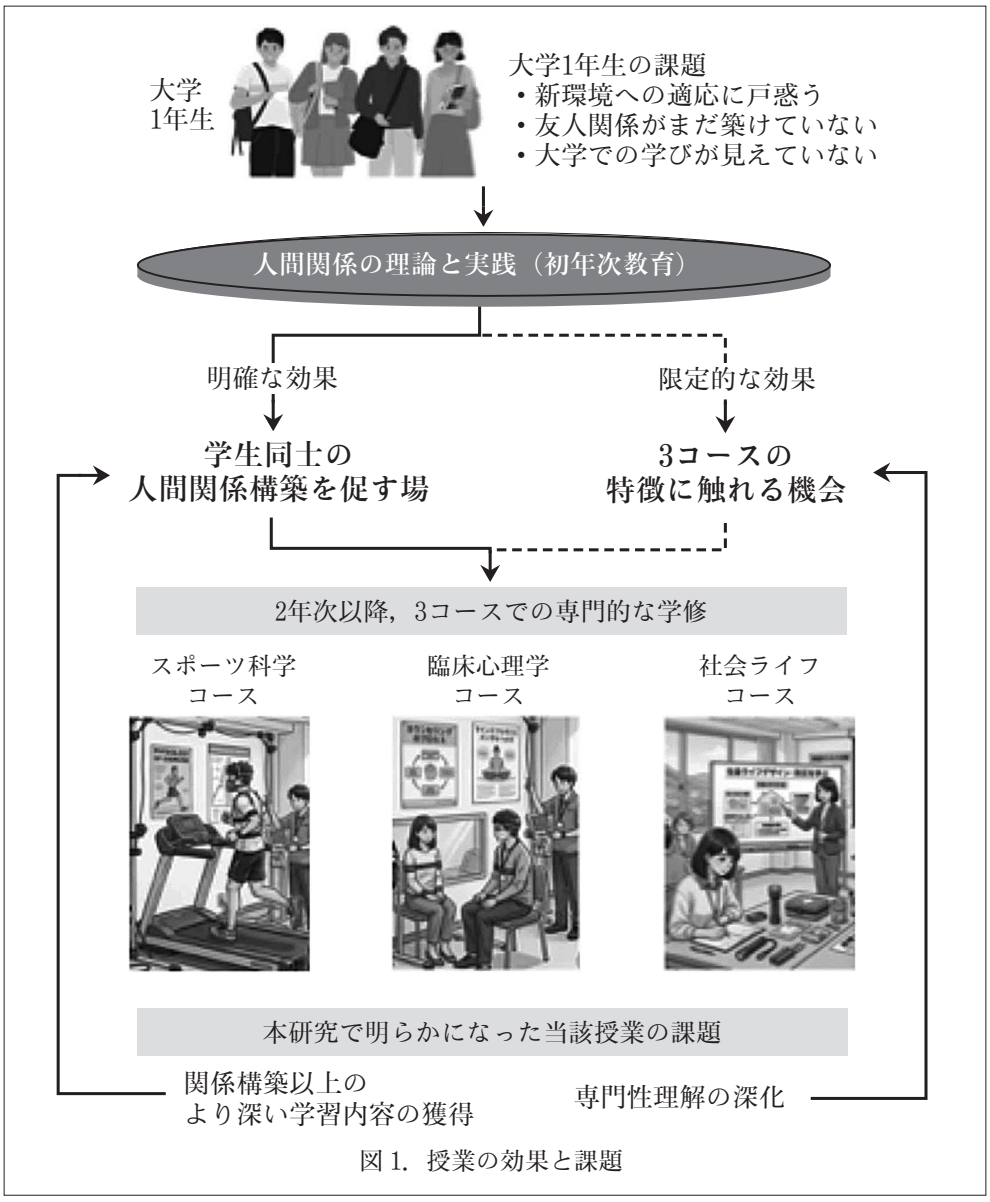

図１．授業の効果と課題

たことが示された。一方で，人間関係構築以上のより深い学習内容の獲得や専門性理解の深化には課題が残されていた。図１に，当該授業の効果と課題をまとめている。以下では，これらの点について，「学生同士の人間関係構築に関する効果」「３コースの専門性理解に関する効果」「授業運営上の課題」の３点から検討する。

3-1．学生同士の人間関係構築に関する効果

授業アンケートおよび担当教員へのインタビューを通して得られた知見の一つは，当該

授業が学生同士の人間関係構築を促す「場」として有効に機能していた点である。特に，大学入学直後の学生に対して，他者と交流し関係性を広げる契機を提供していたことが，本授業の重要な効果として示された。まず，授業アンケートの自由記述には，学生同士の交流や協働に対する肯定的な受け止めがみられた。例えば，「知らない人とグループになることでいろんな人と喋れたり協力したりと楽しかった！」や，「グループワークや話す機会が多かったので，コミュニケーション能力が以前より身についたと思います。」という記述がみられた。これらの記述からは，他者との対話や協力を通して新たな人間関係を築く機会として機能していたことがうかがえる。次に，担当教員へのインタビューにおいても，同様の認識が示された。以下に，対象者 2 名の語りを示す。

（対象者 A）

> *実際（授業中に）よく目にするのは，* SNS *結構みんな交換してるから。なんか，インスタとかなのかな，ラインとかなのかもしれないけど。そういうアカウントを交換して，かなりやり取りは密にしてて，そのままなんかグループに分かれてご飯食べに行くとかっていうのも聞くし。（中略）学生からすると，そこで出会ってコースは違うけど仲良くしてるみたいな人もいるって話はあった，（人間関係の構築に）意味はあるのかなとは思います。（中略）そういう人間関係を築く一つのきっかけとか，そういう『場』かな。学内にそういう『場』ができているっていうところに良さがあるんじゃないかな。*

（対象者 B）

> *（新入生は）今までの人間関係をリセットされた状態でいますので，その新しい環境や新しい人間関係の中での仲間づくりなんじゃないかと思います。（中略）だから，そういう（多様な）人たちの中で人間関係を学んで，コミュニケーションを身につけてもらうっていうことが，人間関係の理論と実践の課題だと思います。*

このような，初年次教育が学生同士の人間関係構築に有効であるとする本研究の結果は，先行研究で示されてきた初年次教育の効果とも概ね一致する。林ら（2018）は，初年次教育としてのフレッシュマン・キャンプが学生の社会的つながりの認識を高め，大学適応を促進する可能性を示している。また，白井ら（2019）は，初年次教育を通して人間関係の構築やコミュニケーション力の向上がみられたことを報告している。本研究で対象とした「人間関係の理論と実践」も，同様に，学生同士が出会い，他者と関わり，協力する経験を通して，大学生活を支える対人関係の基盤形成に寄与していたと考えられる。特に，本授業では，単に既存の友人関係の中で活動するのではなく，「知らない人」とグループを組み，ランダムな他者と交流する機会が意図的に設定されていた点に特徴がある。このことは，大学入学直後の学生にとって，限られた交友関係の中に閉じず，多様な他者と関係を築く契機を提供するという意味で，初年次教育としての意義を高めていたと考えられる。一方で，本研究の結果は，人間関係構築を可能にする「きっかけ」や「場」をいかに提供するかという媒介的側面から捉え直す必要性を示している点で，先行研究の知見を拡張しうるものである。すなわち，本授業は学生同士の関係形成を直接的に完成させるものとい

うよりも，関係が始まる契機を生み出し，その後のつながりを展開させるための基盤を提供する役割を担っていたと解釈できる。この点は，担当教員が「関係性を築く一つのきっかけ」や「そういう場が学内にあることが大事」と表現していたこととも一致する。したがって，初年次教育の改善を考える際には，授業という制度的・構造的な枠組みを整備するだけでなく，その中で学生同士の関係形成をさらに促進するための支援や仕掛けといったソフト面の介入を意識することが重要であると考えられる。

3-2. ３コースの専門性理解に関する効果

３コースの専門性に関する学生の理解への効果について，当該授業が３コースの専門性理解に及ぼす効果は限定的である可能性が考えられる。学生が回答した授業アンケートの自由記述には，「いろいろな講師の方の元で授業を体験できたのがよかった。」や，「コースによってどのようなことをするのか，コースごとの特徴を知ることができたこと。」といった記述がみられた。これらの記述からは，本授業を通して，学生が各コースの学習内容や雰囲気を一定程度認識していたことがうかがえる。一方で，担当教員のインタビューでは，この効果に対してより慎重な見方が示された。

（対象者 A）

> *（各コースを）4回完結で回す時点で，いろんな体験ができるっていう意味の良さが多分生まれて，今それがプラスに働いてるけど。確かに，どれもちょっと少し触れて終わるっていうことになり，それは課題。そういう意味では設計としてもうちょっと回数を増やすとか，選択制にするみたいなことも一つの可能性としてあるかもしれない。*

（対象者 B）

> *社会ライフデザインコースのイメージをつかむものとなっており，一年生にとってこれ（人間関係の理論と実践）のイメージが強くなっちゃう感じがしています。（中略）そこは課題だなと思いますね。コース紹介もまだちゃんとしてない状況の中で，これが先に走っちゃっているんですよね。*

以上のことから，本授業は，３コースの存在や特徴に触れる「入口」としては一定の効果を有していたものの，専門性を深く理解させるという点では限定的な効果にとどまっていたと考えられる。したがって，今後は，授業内での体験活動を各コースの学問的内容や教育目的とより明確に結びつけて説明するなど，専門性の意味づけを補強する工夫が必要である。

3-3. 運営上の課題

最後に，授業運営上の課題について検討する。担当教員へのインタビューからは，当該授業は一定の効果を有している一方で，その効果を安定的に引き出すためには，運営面で複数の課題が存在していることが示された。まず，一つ目の課題は，学生集団の状態と授業内容との適合である。授業の狙い，プログラム内容，学生の実態がかみ合ったときには

授業がうまく機能する一方で，学生にとって活動が簡単すぎたり，振り返りまで十分に深められなかったりする場面もあることが指摘されていた。また，二つ目の課題は，外部講師や外部委託先との連携のあり方である。インタビューでは，外部機関との綿密な打ち合わせが授業の質を支える要因として評価されていた一方で，授業内容の設計や実施が外部側に依存しやすいことも示唆された。専任教員の関与が見えにくい場面もあり，学生が外部講師の授業内容をそのままコースのイメージとして受け取る可能性が課題として指摘されていた。以上のことから，当該授業の運営上の課題としては，学生集団の状態に応じた柔軟なプログラム調整と，外部講師による実践を学部・コースの教育目的と結びつけるための教員側の関与の強化が挙げられる。したがって，今後は，授業内容そのものの工夫に加えて，学生の実態把握や事前・事後の打ち合わせ，教員による意味づけの補足といった運営面の改善が，当該授業の教育的効果をより高める上で重要になると考えられる。

4. 結論

本研究は，大阪経済大学人間科学部の初年次教育科目「人間関係の理論と実践」を事例として，当該授業の効果と課題を明らかにすることを目的とした。分析の結果，主な効果として，第一に，大学入学直後の学生に対して，学生同士の人間関係構築を促す「場」として機能していたことが示された。第二に，臨床心理学・スポーツ科学・社会ライフデザインの 3 コースの特徴に触れる機会として，一定の役割を果たしていた。一方で，専門性を深く理解させる効果は限定的であり，授業内容と学生集団の実態との適合，ならびに外部講師の実践をコースの教育目的と結びつけるための教員の関与強化が課題として示された。

引用文献

林綾子，宮本友弘，水津真委（2018）初年次教育としてのキャンプ体験が大学適応感に及ぼす影響についての探索的研究：Social Provision に着目して．野外教育研究，21（2）：1-13.

鎌田健太郎（2024）初年次教育の導入・改革は学生の学習を促進したか―国立総合大学における因果効果の検討―．教育学研究，91（1）：1-12.

日下恭輔（2024）初年次演習科目における授業設計とマネジメント―北陸大学経済経営学部の事例―．大学教育学会誌，46（1）：18-21.

松田勇一（2024）宇都宮共和大学における初年次教育の現状と課題（16）―2024年度「基礎ゼミ」授業報告と意識調査結果―．シティライフ学研究，26：16-27.

文部科学省．学士課程教育の構築に向けて（答申）：用語解説．2008（参照日：2026年 3 月 9 日，URL：https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_002.pdf）.

大阪経済大学授業シラバス-人間関係の理論と実践-（2025）（参照日：2026年 3 月 9 日，URL：https://syllabus.osaka-ue.ac.jp/daikei_syllabus/2026/10/10_46041_ja_JP.html）

澤田忠幸（2023）初年次生の大学適応感と学業成績・汎用的技能との関連性―学習動機および協同作業観を含めた心理プロセスモデルの検討―．大学教育学会誌，45（2）：26-36.

白井篤，花田朋美，澤田雅彦（2019）初年次教育としての「生活デザイン演習Ａ」―生活デザイン学科における実践報告―．東京家政学院大学紀要，59：149-154.
椿本弥生（2021）初年次授業の開始前の学生の意識―オンラインと対面の比較―．大学情報・機関調査研究集会論文集，10：90-95.